

今回取材に協力してくれたたのは「たらの芽」を生産して18年の最上郡戸沢村在住の大山進さん。栽培を始めた初期の頃は、「たらの芽」特有の鋭いトゲには特に悩まされたという。トゲの少ない品種もあり、最上地域では12月から5月の収穫時期に合った数品種を組み合わせて栽培するなどといった取り組みも行われている。

また、「温度管理は特に重要で、4～5月はハウス内の温度が上がりやすく、20 以下に保つよう注意が必要。最上地方では春の到来が遅く、他地域に比べると温度上昇しにくいことが、栽培期間の長さにつながっているのでは。」と教えてくれた。

ハウス内で使用できる農薬がほとんどないことや、「たらの木」植栽後7～8年経過後の連作障害の対策など課題も多いが、栽培技術力をより高めていけるようにチャレンジして取り組んでいきたいと抱負を語ってくれた。



たらの芽を栽培する大山進さん

たらの芽の促成栽培の仕組み

畑での作業（4月～11月）

畑づくり

芽の整理

穂木養成期間

穂木の収穫

たらの芽を栽培するためにはまず「たらの木」を育てるところから始める。たらの木は採草地・荒畑・遊休地などでも栽培できるため土地の有効利用ができる。一度植えれば2年目から収穫でき、数年間（7～8年）収穫できる。

秋に秋に2m程度に伸びた「穂木」を株もとからのこぎり等で切り取り、倉庫に保管する。高いもので3mにもなる。



ビニールハウスでの作業（12月～5月）

穂木切り

促成ベッドに配置

収穫

1ヶ月程度毎
繰り返し



穂木を1芽がつくように10cm程度ずつに切断したものを駒木と呼び、この駒木をハウス内に設置した促成ベッドに配置する。温度と水を与え、「春」のような環境をつくりだす。

促成を開始してから1カ月程度出荷可能な大きさ（約7cm）まで成長した若芽からパック詰めし、出荷する。



春の味を一足早く

「たらの芽」促成栽培



全国1位の生産量

山菜の王様「たらの芽」。「たらの芽」は、ウコギ科の落葉低木の「たらの木」の新芽の部分のことで、ほのかな苦味とほっくりとした食感から春の訪れを伝える食材として人気である。

全国有数の山菜産地である山形県では、山で採る山菜はもとより、作り育てる山菜の生産が盛んであり、中山間地域の気象条件を活かしながら、品質の良い山菜類が促成栽培されている。特に「たらの芽」の生産量は全国1位で約30%のシェアを誇り、その内ほぼ半分が、最上地域内で生産されている。

(平成20年度生産量全国414t、山形県120t、最上郡65t、農林水産省HPより)

促成栽培は、生育に必要な温度や水分を細かくコントロールして、山採りの時期よりも一足早い季節に収穫・出荷する栽培方法であるが、「たらの芽」については、降雪前に畑で育てた「たらの木」(穂木)を一度収穫し、その穂木を1芽がつくように短く切断したものを更にビニールハウスを用いて冬期間栽培し、その新芽を収穫するといった一出荷二収穫の独特なものととなっている。

「春の味と香りを多くの人たちに早く届けたい」そんな思いから作られた「たらの芽」は、香りが高く風味が良いと高い評価を受けており、天ぷらの美味しさはよく知られているが、おひたし、ベーコン巻きなど手軽な食べ方でも、ほろ苦い味と香りを味わえる。